

防災都市づくりの重要性

第1回目は、東京大学の加藤先生より「防災都市づくりの重要性」をテーマにご講演いただきました。阪神淡路大震災の現場映像、「自助」「共助」「公助」のあるべき姿など、防災都市づくりを進めるために必要なお話がありました。

1 防災都市づくりを進めていく意味を考える

- 防災都市づくりの目的を確認しよう
 - ◇まちづくりを進めながら地域の防災性を高める
 - ◇防災をきっかけにして、まちづくりをはじめ
- 地域の中で自立的な対策を行うきっかけに
 - 起こりうる地域の被災状況について共有の認識をもち、地域の中で自立的な対策の第一歩を踏み出す

2 被害事例と想定をふまえて被害を想像する力が大切

- 条件が変われば被害状況も違うものに
 - 阪神淡路大震災の被害状況は15年前の都市空間、人、気象条件で現れた状況。環境により状況が変わることを忘れずに学ぶことが大切です。
- まちの被害状況を想像することが重要
 - 茅ヶ崎市には、神戸市になかった都市空間の条件があるかもしれません。そういったものもふまえ被害の状況を想像する力が重要となります。

3 想定される被災状況・危険性を正しく理解

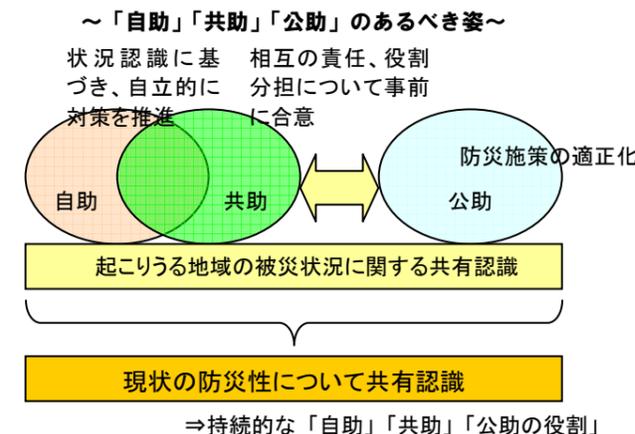
- 自分の問題として考えよう！
 - 防災まちづくりを進める上では、災害を「自分の問題」として意識する必要があります。そのために、地域で想定される災害を正しく理解することが大切です。
- 正しく理解するためには
 - 正しく理解する時のキーとして、環境・社会を見る目と想像力が非常に重要になります。

4 防災の基本は「自助」「共助」「公助」

- 「自助」「共助」「公助」とは？
 - ◇「自助」…個人でやるべきことは個人でやる
 - ◇「共助」…まちの皆の助けでやる、まちの責任でやるべきことをやる
 - ◇「公助」…行政が行うことは行政がきちんと行う
- 「自助」「共助」「公助」がそろって防災は進む？
 - 「公助の言い訳」「共助の自己満足」「自助の無策」に代表されるように非常に低い状態で安定し、それぞれが頑張りきれていないことが社会問題。

5 「自助」「共助」「公助」による持続的な取り組みを

- 防災都市づくりを持続的に進める仕組みづくりを！
 - 「自助」「公助」「共助」にはそれぞれ得意、不得意分野が。それぞれの役割分担を考え、持続的に進めていくための仕組みを考えてみましょう。
- 最適な防災まちづくりの処方箋を作り出そう
 - この地域が本当に必要としているものを普段暮らしている市民の皆さんが導き出すことで、最適な防災まちづくりの処方箋を作り出すことができます。



発行：茅ヶ崎市 都市部 都市政策課
 発行日：平成22年10月
 TEL 0467-82-1111 (内線：2504)
 FAX 0467-57-8377

南湖地区 防災都市づくりニュース

平成22年10月7日[木] 南湖地区防災都市づくりワークショップ開催

VOL. 1

南湖地区で、南湖地区防災都市づくりワークショップを開催しました

ワークショップの内容

ガイダンス

日時：10月7日[木] 18:00-20:00
 場所：南湖会館
 ★ワークショップの概要説明
 ★基調講演：「防災都市づくりの重要性」

1

災害に強い都市づくりを進めていく上で重要なことは、市民と行政などが、それぞれの役割を担い、継続的に取り組みを進めていくことです。

今回は、南湖地区をモデル地区とし、市民と行政がともに学習しながら災害に強い都市づくりに向けた取り組みを考えていきます。

当日は、43名（市民：27名、校長先生：2名、市職員：13名、大学生：1名）の方にご参加いただくとともに、東京大学の加藤孝明先生にご指導をいただきながら、第1回のワークショップが行われました。

防災活動の視点から南湖のまちを考える

日時：10月24日[日] 9:30-12:00
 場所：南湖会館
 ★南湖の課題・良いところを考える
 ★南湖の将来像について話し合う

2

次世代とともに進める防災都市づくり

これからの防災都市づくりでは、地域の高齢化が進む中で、次世代とどのように連携していけるのかということが、とても重要になります。

今回のワークショップからは、地域の中学生にも参加していただき、「自分たちでできることは何か」、「地域と中学生が協力してできることは何か」といったことについて話し合いながら、地域で実際に取り組んでいくアクションプランを作成していきます。

個人・地域でできる防災まちづくりを考える

日時：11月3日[水] 9:30-12:00
 場所：しおさい南湖
 ★地域で取り組んでいくことを話し合う
 ★アクションプランを作成する

3

発表会・シンポジウム

日時：3月予定
 場所：南湖会館（予定）
 ★ワークショップの開催報告
 ★パネルディスカッション

4



●自助・共助のあり方について

自助を進めるための共助の役割

会場 地域の方は、不安があっても実際に行動に移すまで結びつかないことが問題。それを結び付けるようにするにはどうすればいいのか。個人は不安を持っていても積極的に自分からお金をかけたり知恵をだしたりということができないので、個人と地域の橋渡しになるものが必要なのではないでしょうか。

加藤先生 自助を進めるための共助の役割についても議論する必要があると思います。

一人一人がなにをしたらいいか

若い世代に何を受け継いでいったらいいか

会場 次回から中学生にもワークショップに参加してもらおうのですが、若い世代に守ってもらう環境を作っていかなければならないと思っています。そのためには一人一人が何をしたらいいか、あるいは若い世代に何を受け継いでいったらいいかを考えなければなりません。

中学校では火災と地震の両方の避難訓練をそれぞれやっていて、地震の訓練のときに毎回必ず、「被災の段階では保護される対象だけれども、復興の段階ではみんなの力が地域にとって非常に重要になる」という説明をしているので、意識は高いと思います。

火災の発生を少なくするための個人個人の対策も必要では？

会場 火災が発生しないための個人個人の対策をどう認識させるかというのも、テーマにする必要があるのではないかと思います。

加藤先生 火災に対して、出火件数自体は低くなっています。出火密度は、多いところでも、平均1平方kmで1~2か所くらいという風に理解していたらと思います。

どの程度みんな一緒に対応できるか 人的被害をいかに少なくできるか

会場 地震が起きた時に、建物が倒壊する、しないということを心配しても、家を建て替えて倒壊しないようにする以外には手はないですから、それに対する対策を考えなければならないということになります。しかしそれよりも、地震が起きた後火災が発生するという所に大きな問題があるのではないかと思います。実際に地震や火災が起きた場合、どの程度一緒にみんな動いて効率的に対応できるかということが重要です。

阪神淡路大震災でも火災で亡くなった人がいるということも意識しなければならないと思います。人的被害をいかに少なくするかが大事なのではないでしょうか。

●ライフラインなどに関して

地震で漏電したり ガスが漏れたりした場合の影響は？

加藤先生 阪神淡路大震災では電気を原因とする出火件数も多く、これは今までで初めてのケースでした。電力をなるべく早く復旧させようとしてすぐ復電させた結果、電気器具から出火しましたが、たとえば熱帯魚の水槽などがあると思いますが、そこにあるヒーターが地震で倒れてじゅうたんに落ちる。そのまま逃げてしまったあと、復電した時にヒーターが過熱して出火する、ということで火災になります。これは家のブレーカーを落としておけば、防ぐことができます。



消防自動車が入れない道に 有効な対策をしてほしい

会場 狭隘道路が多いということで、私は地元で消防団員をやっていたのですが、実際に火災が起きたときを想定しながらいろいろと道を見て歩きましたら、消防自動車のサイドミラーを閉じても入れないような道が非常に多かったです。

テレビで京都の藁ぶき屋根の集落に、放水銃を置いていることを紹介していたのを見て、そういったものを南湖にもおいていただければ、万が一の時に火災を防ぐことができるのではないかと思います。

加藤先生 時間がかからず簡単に火を消せる装置があればいいということですね。

